2013 6/25
No.1949
毎月第2・第4火曜日発行

政経かながわ

一般社団法人
―神奈川政経懇話会―

ＪＲ東海は６月３日、山梨県都留市の山梨リニア実験センターで、新型車両Ｌ０（エル・ゼロ）系の姿を報道陣に初めて公開した。同車両はリニア中央新幹線での営業運転を想定した車両で、先端傾斜部分は長さが15㍍ある。同社は2027年開業を目指している。

神奈川新聞社

政経かながわ

2013 6/25 No.1949

contents

視点・点描 3
連覇か復活か新星誕生か

講演録 4
「北朝鮮瀬戸際外交の終着点」
コリア・レポート編集長　　辺　真一

国　際 8
シリア内戦、宗教戦争の様相
米介入で新局面、和平会議に暗雲

国　際 10
日中ビジネスに新たな視点を
注目点は内需・協業・環境

くらし2013 12
増えるシングルマザー求人

広告珍談 14
～うまい物がたり⑰
油、売りまひょ

経済反射鏡 15
中央銀行には勝てない
乱高下の国際金融市場

事務局だより

◇横浜定例講演会
2013年7月18日（木）
13時30分～15時
ベイシェラトンホテル＆タワーズ
講師は政治ジャーナリストの
末延　吉正　氏

視点点描

連覇か復活か新星誕生か

ことしも熱い〝夏〟がやってくる。第95回全国高校野球選手権記念神奈川大会が7月7日に開幕する。今回は190チーム（2校の合同が2チーム）が出場するが、これまで神奈川から全国の舞台を踏んだことがあるのはいったい何校かご存じだろうか？

正解は、別表にある19校（鶴見工は閉校）。第30回の1948年に神奈川大会が独立するまでは、さらに予選があり、神奈川の優勝回数と、全国出場の回数はイコールではない。とはいえ、わずかに今回の10分の1にすぎない。

このうち5校が計6回、全国優勝を成し遂げた。49年の湘南、60年の法政二、70年の東海大相模、71年の桐蔭学園、80年と98年の横浜だ。都道府県別では7位タイに相当し、やはり神奈川は野球どころといえる。

学校別の出場回数では横浜の14回が断然のトップ。続いて57年から5連覇を達成した法政二が9回。3位は4連覇を含む8回の東海大相模だ。4位の横浜商（Y校）は23年に神奈川代表として全国選手権に出場した第1号。ちなみにこの翌年から全国選手権で甲子園球場を使用し始めた。

過去20年に限定すると、やはり横浜の9回がトップだが、この間に日大藤沢、平塚学園、桐光学園、横浜隼人が初出場を果たした。神奈川の夏の王者は決して限られた学校のものではない。

一方で、93年の横浜商大は横浜一商時代から27年ぶり、2008年の慶応は46年ぶり、10年の東海大相模は33年ぶりなど復活を遂げた強豪校もある。

この夏、最大の注目は昨年、甲子園で1試合22奪三振の新記録を樹立した松井裕樹投手を擁する桐光。連覇を飾れば、出場回数で単独6位となる。春の覇者、桐蔭が2冠となれば14年ぶりの復活。この夏限りで勇退する土屋恵三郎監督の花道を飾ることになる。

過去の出場校で決まるのか、はたまた20校目の新星が誕生するのか。決勝は28日だ。

（神奈川新聞社運動部長　岡部　伸康）

過去の全国選手権出場校

①横浜14回
②法政二９回
③東海大相模８回
④横浜商７回
⑤桐蔭学園６回
⑥慶応、武相、桐光学園４回
⑨県商工、浅野、横浜商大３回
⑫湘南、希望ケ丘、鶴見工、藤沢翔陵、藤嶺藤沢、日大藤沢、平塚学園、横浜隼人１回
（慶応は東京時代を含めると17回。横浜商大は横浜一商時代を含む。藤沢翔陵の出場時の校名は藤沢商。鶴見工は閉校）

油、売りまひょ

日清オイリオの元幹部・間野昭一さんと、京都山崎の油の神さまにお参りして、荏胡麻（えごま）について教えてもらった。ところがその晩、飲みすぎて忘れてしまった。

ならばと植物辞典で調べた。荏胡麻はシソ科の一年草、白蘇草とも十捻とも書く。古くは白紫蘇、宇古万（うごま）、油荏（あぶらえ）とも呼ばれた。平安初期の法令、延喜式にもその名が登場するほど、長い歴史をもつ。夏、白い花を稲穂のようにつけ、種から油をしぼる。京都に住まう公家や、神社や寺院の灯油になったとある。

油の神さま、離宮八幡宮の神人（車馬の警備や雑役をする人）たちは、大山崎油座を結成。荏胡麻の主産地である瀬戸内海沿岸から仕入れ、油をしぼり、都へ売り歩いた。

京都伏見に油懸山という号をもつ、西願寺がある。その境内に「油懸（あぶらかけ）地蔵」が安置されている。あるとき、山崎の油商人が門前でころび、かついでいた油が流れ出てしまった。災難とあきらめた彼は、残った油をお地蔵さんにかけてお祈り。と翌日から、日増しに商売繁盛。とうとう大長者になったという。

掲出した広告をどうぞ。都で油を売りまわった油座の連中が、「日清の天ぷら元気今日も勝ち」と、乾杯してるような雰囲気ではないか。日清葡萄酒も販売していたらしく、マンガの吹き出しがおもしろい。右の男から

「たまにゃ　ぶどうしゅもいいものですな！」

「なんと元気がつく食べ物だろう。それにこの油で揚げた天ぷらの旨いこと。もりもり元気でるわい」

「皆元気で親方もさぞ喜んでくれるでござんしょう」

左端の親方が

「俺は只だまってのんでくって勝つことにするよ」

と貫禄をしめす。

さらに、お膳の下にいる猫まで

「ニャンてうまいんでしょう」

独占販売する彼らは南北朝のころ、64名もの組織になった。しかし応仁の乱以降から、原料が菜種や綿実にかわって衰退。豊臣秀吉が洛中油座の特権をうばったという。

荏胡麻にもどる。江戸時代、人びとの生活に有用な3種類の植物を「三草」といった。

麻・藍・紅花の3つ、麻・藍・木綿の3つ、そして木綿・麻・荏の3つ。荏は荏胡麻である。それほど貴重な植物であった。いまはどうなったか。荏胡麻食用油として、ちゃーんとスーパーなどで販売されている。日清オイリオの製品かどうかは知らない。

（美術エッセイスト、茅ヶ崎市在住）

（図）「日清サラダ油」の広告・1951（昭和26）年1月掲出